

神田明神下看屋 新二十八

一三十六盃

下谷藩中之衛門

七十七

小松川吉左衛門

一八寸重箱にて九盃
豆腐汁三盃

〔浪花譜誌街迺噂三鶴人、さやうさそれもムリヤス、江戸でまた引越に蕎麥を配るのは、どふいふ訣でありヤ正ね、千長、アリヤ訣もなく手輕にいくから、初ツたことでムリヤ正、万松、さやうさ二八を二ツ三十二文で間に合から、全く其訣でありヤスのさ、イヤ蕎麥といへば、此地のそば屋におだ卷むしといふ、看板がありやすが、アリヤ何でありやすかね鶴人、玉子蒸の玄つばのことでありやす、いろ／＼な名を書ヤスが、皆な似たやうなものでムリヤス、

〔京都午睡三編中宿替引越の節上方の宿茶とて、附木等を配ることなく、江戸は悉く蕎麥を配ること也、蕎麥やもよく心得て、附合は何軒、大家主はどここと皆配りて後、其代いくら／＼と取に來る、誠に無難作なり、奉公人の新判をもて來る者にも蕎麥にて濟也、こちより親元へ判取にやる、是にも蕎麥也、日出度につけ悲しきに付け、皆そばにて仕來りとはなしけり、是等馴れてはをかしからね共始の内は獨笑すること也、



麺

下學集

下

飲

食

麺

〔饅頭屋本節用集不食物〕麺

〔易林本節用集不食服〕麺

〔倭訓栞二十六〕ふ
麺筋をよぶは、麺をもて作るがゆゑ也、

〔段注說文解字五〕麺
小麥屑皮也、麺之言、膚也、膚小麦之皮、不可食用故無名可食从麥夫聲、甫部無切、

〔雍府州志六產〕麺
處々造之、然西洞院東四條通河棚之製造爲勝、近世糟藏而送他邦、其所到是稱